

きた事件が、見えるようになってきたのも新しい動きである。

近代仏教の場合、まず定期刊行物まで遡ってみるだけでも、歴史のパスpekティブはかなり異なってくる。ある事柄の文脈や布置を把握するためには、必要な記事をピンポイントで読むだけではなく、その事柄から面的に、さらには他の雑誌を含めて、横断的に雑誌を読んでもいくのが理想である。そうであれば、すべての雑誌を読むことは不可能である以上、信頼に足る記事目録が不可欠になってくる。しかし、明治の仏教雑誌研究はあまり進んでいなかったのが実情である。今後、雑誌の読み込みが進めば、事件や人物の見え方も変わってくるだろう。個人の書簡や日記などの研究もまだまだ進んでいないが、求道会館の近角常観資料研究のように優れた成果もあがっている。本発表で扱う正徳寺の宇津木二秀(一八九三—一九五一)の資料も、そうした活字化される前の手稿、書簡、名刺、写真などのさまざまなモノからなっている。本発表では、実際の調査の手順に触れながら、モノの発見と意味の発見という二重の意味での発見の具体的な過程を報告したい。

宇津木二秀は、ロサンゼルスの開教師であり、龍谷大学などで英文の教員を務めた人物である。Adele Algeo の論文 Beatrice Lane Suzuki and Theosophy in Japan のビアトリス鈴木が運営していた神智学、大乘ロッジの中心人物として名前があがっており、仏教書の英訳はあるが、著作も少ないために、その名前はまったく知られていない。しかし彼が住職をしていた正徳寺には、その国際的な人脈を示す書簡、名刺、写真などが多数眠っていた。

貴重な資料のひとつは、Mahayanist と題する雑誌と、Mahayana Association の名簿である。一九一五年に結成され、雑誌は翌年には終刊になっている。宇津木が運営に協力したこの協会の中心人物は、浄土真宗で得度したW・マクガバンと臨済宗で得度したM・T・カービーである。欧米人の大乘仏教での帰依と修行ということでは、最も早い例になる。短命には終わったが、大乘仏教の欧米への流布という点からすれば、かなり重要な団体である。参加者の点からすると、大乘協会の後継とも言えるものが大乘ロッジであり、書簡からはビアトリスが信頼している様子がうかがえる。写真からも、宇津木の人脈がいかに広い範囲に及んでいたかが分る。

正徳寺資料の発見と解説は、学知の相対化を含む仏教史のパスpekティブの変化、インターネットを介した情報交換、若手研究者の出現、デジタル技術による資料の伝達や保存の容易化など、理由はあげられるが、近代仏教では資料がいまだ豊富に残っているというのが最大の理由である。逆に言えば、代が交替すると消滅する危険性は大きいということであり、そこに資料調査を急ぐ理由がある。

パネルの主旨とまとめ

大谷 栄一

吉永、岡田、谷川、大谷は、共同研究「近代宗教のアーカイヴ構築のための基礎研究」(科研費・基盤研究(B)、代表者…大谷、二〇一—一四年度)に取り組んでおり、本パネルはその中間報告である。今回は、調査・研究の対象となる資料の探

素や整理、保存の過程に注目し、各自のフィールドワークにおける資料（史料）調査の「調査履歴」を開示することで、近代宗教史（近代仏教史）研究の調査論、資料論を検討することをめざした。

岡田報告では、梵暦運動の多彩な活動を各地に残る史料をもとに再構成し、広範な運動の全体像に迫るための調査経験が報告された。谷川報告では、佐田介石に関する史料調査の歴史的経緯が説明され、その一次史料の引き継ぎと整理の結果、明らかにすることが示された。菊地報告では、民俗学における「資料」の定義と類型が提示され、京都大学人文科学研究所の所蔵資料を事例とした資料批判論が提起された。最後の吉永報告では、資料を文脈化・物語化するための三つの物語（小さな物語、中くらいの物語、大きな物語）が示され、正徳寺所蔵の宇津木二秀の資料調査で浮かび上がった発見や問題が指摘された。

各報告者に対する大谷のコメントは、以下の通りである。岡田報告には、（一）工藤康海の措定した梵暦運動の全体像とは違った全体像を描くこともできるのか？（二）スタンフォード大学への留学を通じて全く違う視座から自分の研究対象を見つめ直したとの述懐があるが、それは、吉永のいう「大きな物語」の習得なのか？ 谷川報告には、（三）浅野研真や上坂倉次の調査の方法の有効性とは何か。また、二人の方法には同時期の明治仏教史編纂所の影響があるのか？（四）調査履歴の共有による実証研究の信頼性の確保というが、その学問的意味は？ 菊地報告には、（五）京大文化史学派の研究では、大学以外にど

のようなフィールドがあるのか？（六）過去の情報は「記録（document）」のみならず、「記憶（memory）」としても継承されるのであれば、当該対象の「記憶」はどのような抽出できるのか？ 吉永報告には、（七）自身の中で、三つの物語はどのように位置づけられているか？（八）資料調査という点で、海外の研究者とどのように協力ができるか？との質問をそれぞれ投げかけた。そのリプライとして、岡田からは、（一）近年の調査で、工藤が探求しなかった明治期の梵暦運動の実態が明らかに becoming つつある、（二）ヘイドン・ホワイトの方法論を直接学ぶことで、「伝統と近代」や「排仏論と護法論」といった従来の図式を相対化して、日本の近代と宗教の問題（具体的には梵暦）を再考できるようになった。谷川からは、（三）浅野の方法は史料・情報の発掘の点では有効だが、上坂が地道に収集・整理に努めたのとは異なり、信頼関係の構築など史料探索における丁寧さを欠いた点で問題を孕んでいた、（四）方法や体験の伝授、実証手続きの確かさとその限界の明示、さらには史料収集過程それ自体を「研究史」として重視する点でも、学問的意味があろう。菊地からは、（五）彼らの訪れた調査地や留学先などとの関連も当然浮かび上がり、そのような関連諸地域のネットワークとしてフィールドを構想し得る、（六）当事者の教え子たちに伝えられた記憶も、貴重な手がかりと考えている。ただ、総体的に近い過去であるが故に、関係者に対する配慮も肝要となってくる。吉永からは、（七）「小さな物語」に耳を傾けるべきであり、それをつみかさねることで、新しいパースペクティブを生むことができる、（八）海外ではすでに国を越えてインタ

ーネットを活用しての共同研究が始まっている。今後は日本在住の海外の研究者の助けを借りつつ、日本発信の国際的な共同研究や持続的に情報を交換しあうような場が必要ではないか。以上のようなリプライがなされた。

今回のパネルで明らかになった課題に応えるため、今後も共同研究を継続していきたい。

移民と宗教を結ぶホームランドへのノスタルジア

代表者 藤野 陽平

コメンテータ 三木 英

司会 白波瀬達也

ハワイ日系宗教における現地適応と「日本」

高橋 典史

本発表の前半では、理論的な整理を行うことにより、本パネルの試みの要点を説明した。その次に、発表者がこれまで研究を進めてきたハワイを事例に取り上げて、現地の日系仏教関係者たちの〈ホームランド〉への〈ノスタルジア〉に関わる言説を考察することにより、移民の宗教が供給する集合的なアイデンティティの変遷の一例を、世代の問題に着目しつつ示した。ハワイの日系移民は一世紀をこえる歴史を有しており、現在ではホスト社会にかなりの程度適応しているといえる。そのた

め、本発表では、本パネルで論じていく多様な移民の宗教を考えるうえでの出発点となる事例として、ハワイの日系仏教の日系移民との関わりの変遷を提示したのである。

そもそも、移民の宗教とは、制度においては宗教活動のほかに、移民たちの生活上の互助機能や文化機関等としての役割を担い、意味に関しては聖俗両面に関わる移民の集合的アイデンティティの資源となりうる存在である。一方、移民とは、〈ホームランド〉から切り離された人びとであるため、〈ホームランド〉への〈ノスタルジア〉を抱えつつ、新たなアイデンティティの模索を強いられる状況に置かれる。それゆえ本パネルでは、宗教が、異国においてそこに集う移民たちに〈ホームランド〉への〈ノスタルジア〉という点で、いかなる意味を提供しているのかを検討することをテーマに掲げた。

さて、一九世紀末以降、日本からの移民を追うように数多くの日系宗教教団がハワイへ渡っていった。なかでも浄土真宗本願寺派を代表とする日系仏教は、ハワイの日系社会における宗教の中心的な位置を占めていった。こうした日系仏教の寺院は、第二次世界大戦以前の日系移民にとっては、一般的な宗教活動だけでなく、日本の言語文化を提供する機関としても重要な役割を担った。

布教開始当初、キリスト教勢力に対抗心を抱いていた日系仏教は、日本国内の延長線上で、「海外同胞」である仏教徒を救うという姿勢で臨んだ。しかし時代が下り、アメリカ社会で排日の風潮が高まってくると、日系仏教にも現地適応、すなわち「アメリカ化」の志向が生まれていく。しかし、いわゆる排日